



第45回熊本県学校事務 研究大会 一速報一

熊本県学校事務研究協議会
 発行人 会長 宮崎 文子
 編集代表 研究部長 平野 哲也

～目次～

- 日程
- 講演
- 質問回答
- 交流会参加レポート
- あとがき

令和4年1月14日（金）、第45回熊本県学校事務研究大会をLIVE配信にて開催いたしました。当日はたくさんの方々にご視聴いただき、文部科学省の廣田様から大変貴重なお話をご講演いただくことができました。無事に大会を終えることができましたことに熊事研役員一同、大変感謝申し上げます。

日程

13:10 ～ アクセス開始

13:20 ～ 開会行事

13:25 ～ 講演「自ら未来を切り拓く事務職員になる」

～今を見つめ、未来へ踏み出す～

文部科学省 大臣官房文教施設 企画・防災部

施設企画課 企画調整官 廣田 貢 氏



休憩（アンケート回答 13:25 ～ 14:55）

15:15 ～ 質問回答

15:45 ～ 閉会行事



講演 「自ら未来を切り拓く事務職員になる」

～今を見つめ、未来へ踏み出す～

文部科学省 大臣官房文教施設 企画・防災部施設企画課 企画調整官 廣田 貢 氏

講師の廣田様は、学校設備政策のほか、教育委員会への出向、コミュニティ・スクール、学校の働き方改革などの政策や新国立競技場建設の整備、学校施設の在り方と支援策に携わるなどの様々な立場の経験から、自ら未来を切り拓く事務職員について講演していただきました。

冒頭では、今日の日当で「全員が主体的に学びに向き合い、これからの学校の未来と子どもたちの豊かな育ちをジブンゴト化する」をあげられ、「あなたたちの学校環境は子どもたち・自分たちにとってベストの状態ですか？」という投げかけから始まりました。

「子どもたちの生きる未来と学校の今」

少子高齢化や人口減少などにより、子どもたちが生きる未来は激しく変化し、予測困難であるため、今後は困難（課題）に対して自ら考え行動する人材・新たに価値を生み出すことができる人材が求められ、変化が著しい環境を生きていく子どもたちにとって必要なことを学校現場の中だけで教えていくことは、ほぼ不可能であることを話された。

全ての子どもたちの可能性を引き出し、誰一人として取り残さないことがこれからの教育の姿であり「個別最適な学び」「協働的な学び」が学校現場に求められていること。多様な人とのかかわりを生み出していくかが重要であること。ICTの活用により空間を超え、学びをつなげ、ニーズに応じた学びに近づけることができるが、一方で学校現場は複雑化・困難化しているため、課題解決のためには「チーム学校」「働き方改革」を実現していくことが重要であることを話された。

「チームワーク溢れる学校づくり」

機能しているチームの特徴をあげ、自分の弱みを発信し、お互いの強みを生かし、弱みを補い合い、パズルのピースをはめるように仲間と助け合っていくことの重要性を話された。学校であれば、校内だけではなく、地域に対しても学校の弱み・課題を発信し、地域から助けられ、地域を助け、お互いに助け合うということが大切であること。事務職員でいうならば、一人では解決できない物事を、学校を超えてつながり、共同学校事務室という大きなツールを使うことで、複雑・困難な課題を解決していくことができることを話された。

また、チームとして機能するためには、目標・ビジョンの共有が重要であり、課題・目標に対して「ジブンゴト化」し、私には何ができるか？何をすべきか？を考え、チームとして行動していく（アクションの共有）。個々のリーダーシップが発揮されることで、ワンチームが生まれ成功体験の共有とチームとしての進化につながると話された。

○投げかけ①：チーム力を高めるために学校事務職員の私にできることは何だろうか？

- ・情報の共有、専門的な立場からの意見。教育機関とのパイプ役になれる
- ・話しやすい、相談しやすい事務室づくり（場づくり・環境づくり）



- ・多方面から情報収集する。目標を設定し共有する
- ・就学援助制度など教員と保護者への情報発信（保護者に近い存在として）

「学校と地域の連携・協働」

環境が変わるなかで多様性とのかかわりを増やすことが子どもたちの「生きる力」を育むため、学校内にとどまらず、保護者や地域と連携し「社会に開かれた教育課程」がこれからの学校づくりのヒントになるとを話された。

また、諸外国と比べて、日本の子どもたちの自己肯定感が低いことをグラフで示し、子どもたちが頑張りたい！優しくしたい！という思う根本は「自分への信頼」であること。自分の価値を見いだすことができるかが重要であり、愛情をどれだけ受けているかも関係している。様々な家庭があるなかで「包まれ感」をどう生み出していくか。地域の人や教職員は、そのきっかけを与える存在になるべきであり、私たち事務職員も子どもたちに対して愛情を注げる立場であること、子どもたちの幸せを引き出す・作り出す・生み出す一員として学校の中にいることを意識してほしい、と話された。

地域との連携については、対話を用いて色々な人たちの想いを重ね合い、「どんな力を身につけさせたいか・どんな子どもたちに育ててほしいか」を共有していくことが大切であり、そこにとどまらず、自分には何ができるだろうか？と「ジブンゴト化」することが重要であることを話された。

「学校における働き方改革」

学校現場は複雑化・困難化しているため「働き方改革」を実現していくことが重要であり、職場の凝り固まった文化・風土を変える必要があることを話され、働き方改革を進めることで学校が助かり、学校は子どもたちにまなざしを向けることができる。みんなが笑顔で過ごせるように、子どもたちの幸せを生み出す学校づくりのために、明日また行きたい学校となるために働き方改革を進めていくという意識を共有する必要があると話された。

子どもたちの成長のために何を重視し、「時間」をどのように配分するかを考えていかなければならない。チームとしてリーダーの強い想いの下、客観的・俯瞰的にとらえることができる事務職員としての力を発揮することができるのではないかと話された。また、学校内だけでなく、共同学校事務室を機能させ、地域で・地区で・皆で取り組むことができるのではないかと話された。

○投げかけ②：地域との連携・協働や働き方改革、学校事務職員の私にできることは何だろうか？

- ・幅広い視野で学校の様子をとらえ、事務職員という立場で業務改善を提案していく。

（アンテナを高くもつこと）

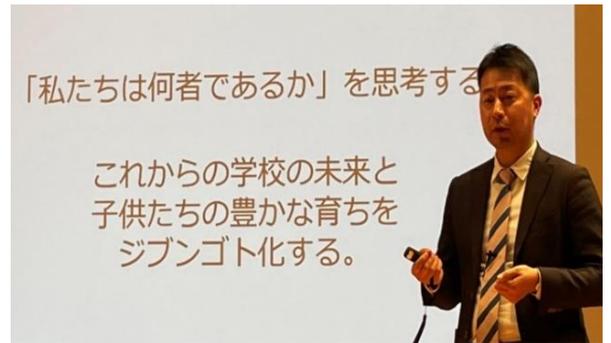
- ・人材バンクの管理（事務職員としての仕事の幅を広げる）
- ・校外、教育委員会との関係づくり
- ・地域と学校の窓口になり、つなげていく

「学校事務職員の役割・価値を考える」

イソップ寓話「3人のレンガ職人」の紹介があり、同じ仕事をする3人の仕事への意識の違いを挙げられた。学校のなかの唯一の事務職員である私の役割はなんだろうか？「事務をつかさどる」になって4年、事務を進めるにあたって、どんな思考をもちながら進めていくかが重要である。私のかかわりによって子どもたちの幸せを生み出すことができるかもしれない、社会を変えることができるかもしれないという想いのなかで、事務職員という仕事をしていくことが大事。「ジブンゴト」として主体的に積極的に考え、行動する事務職員になることが大切である。

投げかけ③：つかさどるの位置づけから4年。学校の未来と子どもたちの豊かな育ちのために、事務職員はどう変わる？変えていく？

- 教育活動へのかかわりを見直す
- 事務職員から働く幅を変えていきたい
- 自ら提案し事務職員の立場から学校経営を行う
- アンテナを高くして情報収集したい。事務職員として第三者としてのかかわりをしていく
- 事務室から出て、教育とかかわっていきたい（事務室をとしない）



「みなさんへのメッセージ」

最後は小学校で習う「スイミー」をあげられた。

「スイミー」は一匹の黒い魚が、ひとりぼっちになった寂しさや不安の中、現状をどうにかしようとする他の魚の群れと協力し「大きな魚のフリをする」というアイデアを出し、最後には「ぼくが目になろう」と自分の個性を生かし、逆境を乗り越える話である。

自分の中でできないという決めつけや諦めは、一歩を踏み出す勇気で壊すことができる。誰かが風をおこすのを待つのではなく、自ら未来への風をおこしましょう。

「自分の可能性を信じてください。」とメッセージをいただきました。

講演についての質疑応答

市町村教育ビジョンや学校教育目標を意識した学校事務職員の連携と共創について、連携と共創の窓口として事務職員がどうあるべきか？市町村教育ビジョンの設定、学校教区目標の設定において事務職員がどうかかわりを持つべきか。

学校もめまぐるしく変化していかなければならないことを事務職員も理解し、組織においてどんな学校を創っていくのか、どんな組織を作っていくか、という一番最初のゴールの部分の共有が重要である。

リーダーである校長がどんな学校にしたいのか、教育委員会としてどんな方針を打ち出しているのか、ビジョンを確認し、事務職員も理解することで、柔軟な対応や原動力に繋がる。

教育委員会と個々の事務職員との連携はハードルが高いため、共同学校事務室（チーム）を活かすことが大事であり、リーダーが教育委員会と意思疎通を図れるか、物申せるかが重要である。

共同実施の場合でも、仲間と想いを重ね、乗り越えていくことができる。

Q1 メンバー全員がリーダーシップを持つことが重要と講演の中でありました。実際事務センター内では受け身になる人が多いと思います。班長としてどのように関わる必要があるか日々悩んでいます。

Q2 自分ではリーダーシップを発揮しているつもりなのですが、そこに手応えを感じれば感じるほど、逆にメンバーの主体性がなくなっていく（依存主義（指示待ち）が強まる、なかなかアイデアを出してくれない）気がします。役割を分担し、責任を持たせるようにするなど仕組みということに取り組んでいるつもりですが、なかなか上手くいきません。何か良いアイデアがあればご教授いただきたいです。

A1 & 2 : どうやってコミュニケーションを取っていくか、リーダーシップを発揮していけばいいのか。メンバー全員をひきあげていくのは大変。講演のなかで意見の対立を恐れないと話したが、様々な温度感のなかでチームを作っていくには、何を成し遂げていきたいかというゴールイメージ・目標・目指す姿を共有することが大切である。

受け身になる人を引っ張る方法として、役割を明確にし、リーダーが周りを信頼し任せること。我慢や促しなどの働きかけと勇気づけを行い、一緒に進んでいくことを意識していただきたい。

Q3 これからの学校の中核となっていく若手の事務職員にとって、一番身につけておいたほうがいいスキルを教えてください。

A3 一番はコミュニケーション力。若手であればあるほどフットワークを軽くして動いて欲しい。相手と一緒に仕事をすることを意識し、どのように動いたら相手も幸せになっていけるだろうか？と相手の出方などもみながらコミュニケーションを図って行って欲しい。

〈今も大切にしている3つのワーク〉

フットワーク：自ら足を運び、進んでいく。

ネットワーク：つながりを大事にし、相手とつながることで仕事は成り立っていることを意識する

ハートワーク：仕事は心でするもの。パソコンに向かったの仕事だが、その先にどれだけの意識と心を持つことができるか。

と紹介していただいた。

Q4 校務のペーパーレスを進めたく、事務から提案をしたのですが、校長先生が紙派でゆるぎません。紙代の節約・時間の確保など色々な角度から攻めていますが難しいです。校長と議論をつくして方向性を出すか、このまま協力してくれる職員と可能なところから実行して崩していくか、それとも他の方法でのアプローチがあるか助言をいただけませんか？

A4 学校現場だけではなくペーパーレス化はよく言われていること。けれども、なかなか進んでいかない人は役所にもいる。(年齢・立場が)上の人に多い傾向である。

大きく2つのアプローチがある。ひとつは強制終了で強制的に紙を出さない。相手が仕方ないなと応じることもある。もうひとつはじっくりじっくり攻める方法がある。例えば教頭に相談し、教頭から伝えてもらう。仲間を増やし、周りから攻めていくなど。

目標を達成するための戦略作りが重要で、周り道かもしれないけど、ゴールに到達するには最短のルートであるかもしれない。あきらめずに、頑張ってください。

Q5 「明日また行きたい学校へ」のポイントのなかに、教育委員会の覚悟とありました。地教委によって学校への関わり方に温度差があるように感じます。教育委員会の覚悟のために、学校事務職員からの働きかけはもちろんです、国（文科省）からの具体的な働きかけを教えてくださいと思います。

A5 事務職員が頑張っても環境が整わない場合がある。そこに教育委員会が理解を示し、教育委員会がしっかり動いていかなければならないことについて私たちも教育委員会に働きかけていきたいと思う。

先日、別の事務職員のセミナーに教育委員会の方に参加してもらった。教育委員会が一緒になって想いを共感するのはすごく大事なこと。様々な場面において教育委員会を引きずり出してくるのは大事。管理職と一緒に研修を受けてもらい、同じテーブルで、これからの学校について意見を述べ、共有する。それを見て教育委員会はやってよかったと思う。このサイクルを創っていくことが大事である。

国としては教育委員会に対しても様々な働きかけを行っていく必要がある。標準職務の参考例を示し、つかさどる事務職員として学校経営に参画していくために文科省としてこんな管理規則の改定を行っていく必要があるのではないかと示させていただいた。それについて各自治体においてしっかりと受け止めてもらい、その方向に向かっていくように、文科省としても様々なチャンネルを使って引き続き働きかけていきたいと思っている。

事務職員の皆さんにも諦めずに働きかけていただけたらと思う。

お知らせ

①令和4（2022）年度版 学校事務必携について

12月中旬頃に、「令和4（2022）年度版 学校事務必携発刊のご案内」を通知しました。

例年たくさんの方にご活用いただき、好評をいただいております。令和3年度版と同様に、B5版、ページ数210ページ程度で、熊事研会員につきましては税込み800円、会員外の方については税込み1,200円での販売を予定しております。申し込み期限は令和4年1月27日（木）までとなっております。支払い方法は各地区の研究部員までお尋ねください。納品は3月上旬を予定しておりますので、近くなりましたらまたお知らせします。

②令和3年度研究のまとめの発行について

熊事研研究部では、今年度、各研究部員の自校での実践をレポート形式にて提出してもらい、その成果と考察をまとめたものを「研究のまとめ」として発行することとしました。お手元に届きましたらお読みいただき、ご自分の学校での実践に生かせるものがあればぜひ実践されてみてください。

また、第45回熊本県学校事務研究大会のパネルディスカッションのパネリストとしてご登壇いただく予定でした、山江村 教育長 藤本 誠一 様、水俣市立水俣第一小学校 校長 光山 忠 様、氷川町及び八代市中学校組合氷川中学校 主任事務長 神尾 浩輔 様に、討議をしていただく予定でした2つの柱についてご回答いただけるとするとどのようなご意見になったのかをまとめていただいております。お忙しい中にもかかわらず快諾いただいておりますので、是非ご一読下さい。

「未来への風プロジェクト in 熊本」が下記の日程のとおり開催されました。研究部のメンバーも参加しましたので、交流会参加レポートを書いてもらいました。

日 時：令和3年11月13日（土） 10：00～

場 所：くまもと森都心プラザ AB 会議室

主催者：佐世保市立大野小学校 事務主任

宮本 隆宏 氏

（九州地区公立小中特別支援学校

中堅事務職員有志の会 代表）

対象者：公立小中特別支援学校事務職員

（39歳以下または経験年数15年以下）

日 程：

10：00～10：05 ①コミュニケーションとは（アイスブレイク）

10：05～10：15 ②なぜコミュニケーション力・交渉力・決断力なのか（講義）

10：15～10：55 ③チームビルディング（マシュマロチャレンジ）

休憩

11：05～11：45 ④コンセンサス（交渉力・決断力）（NASAプログラム）

11：45～12：00 ⑤社会に開かれた教育課程（グループワーク）

（13：30から同プロジェクト主催のセミナーも開催されました。）



【シラバスより】

（研修の目的）

企業向け新人研修プログラムを通じてコミュニケーション力・交渉力・決断力を養う。

（研修の概要）

企業人事担当者向けプログラムの経験者より、座学形式ではない体験型の研修を行う。

（研修の目標）

体験型の研修により、他者の多様な考え方に触れることで社会に開かれた教育課程の必要性を理解し、社会に貢献する学校事務職員の実践へと結び付けていく。

（研修の進め方と方法）

- ①最初にコミュニケーションワークを経験することによりコミュニケーションの取り方を学ぶ。
- ②問題意識を提示する。
- ③チームビルディングゲームを使いながら役割分担やコミュニケーションの重要性を、体験を通して学ぶ。
- ④NASAのプログラムを使い合意形成を図る訓練を行うことで交渉力と決断力のスキル向上へと結びつける。
- ⑤受講者のコミュニケーション力・交渉力・決断力のスキル向上にどのような視座を与えるか考える。



(参加者の感想①)

会場は、前方スクリーンにプロジェクター2台を投影する形で、A～Iの9班に分かれて机が設置してありました。前方スクリーンに「名札をつけて全ての参加者と挨拶をしてください」と表示があったので、名前の下に「熊本県」と書き、20名程度の参加者と挨拶を交わしました。参加者は熊本からが1番多かったですが、北九州市をはじめ九州各地から集まっていました。

- ①アイスブレイクでは、主催者の宮本氏より、本会を開催するに至った経緯のお話があり、全国的に本会は定期的実施しているが、九州地区での実施は今回が初めてということでした。また、「今日の目標は楽しむことです」ということで、和やかな雰囲気ですらリラックスして参加してほしいというお話がありました。その後班内で自己紹介をしましたが、A4コピー用紙を4分割し、3つは好きなもの、1つは嫌いなものを書きますが、4つとも好きなものだという体で自己紹介をし、嫌いなものはどれなのかを当てるというゲーム形式の自己紹介をしました。
- ②講義では、学校事務職員に必要なこととしてコミュニケーション力・交渉力・決断力をあげた理由を、自身の経験と取組の効果からお話しされました。
- ③チームビルディングでは、マシュマロ1個、パスタ麺20本、マスキングテープ90cm、ヒモを用いて、パスタ麺を骨組みとしてタワーを作り、机からマシュマロまでの高さを競う、というゲームでした。チーム対抗で2回戦行われましたが、私の班は、1回目は自立できず、記録なしになりました。2回目までの協議の時間は5分で、どうすれば崩れないか、記録を伸ばせるか、班員で話し合い、2回目は40cmまで積み上げることができました。私の班は4人でしたが、5分という短い時間のなかでも4人で知恵を出し合うことで成功させることができ、協議することの大切さを感じました。
- ④NASAプログラムでは、実際にNASAの研修で用いられる内容に取り組みました。月に行った際に、自身の小型船が不時着し、母船とはぐれてしまい、小型船は破損し、使えるような物品15点に優先順位をつけて持ち運び、生き残る、という設定でした。物品リストが配布され、まずは個人で順位をつけました。その後班で協議しますが、優先順位のつけ方がやはりバラバラで、「これは月では使えないと思ったから優先順位を低くした」「これは絶対に必要だと思う」などと意見が出ました。班での話し合いの際には、合意形成がテーマとされていました。合意形成とは、互いの主張どちらも尊重した最適解をチームで作りに上げる、というもので、妥協や譲り合いではないということでした。その前提があったので、班内での話し合いはより深みのあるものになり、参考に配布された回答とはずれがありました。短い時間で班としての最適解を導き出すことができたように思います。
- ⑤グループワークでは、社会に開かれた教育課程、そして社会に貢献する事務職員とは？また、10年後、30年後にどんな社会になっていたらいいか、というテーマのもと、自由に協議しました。アイスブレイク、グループワークを経て、班内でも話しやすい雰囲気になっており、様々な意見が出ました。

宮本氏のテンポの良い進行に、少しでも気をそらすと話が分からなくなりそうになりましたが、会場は終始和やかな雰囲気ですら楽しく参加することができました。また、一貫して私が感じたことは、「短い時間での協議の多さ」でした。タイムスケジュールが細かく設定してあり、「3分で話し合い」「5分で目標決め」などが多く、戸惑いながらも時間が無いのでグループで一生懸命話し合いました。その中で、やはり今回のテーマである「交渉力」と「決断力」が必要になってきました。学校事務職員は時間割が無いので、時間に追われることはあまりありません。あとで考えよう、あとで決めよう、ということが多くなっても、最終的にはなんとかなっています。今回の研修で、コミュニケーション力・交渉力・決断力がなぜ学校事務職員に必要なのか、分かったように思います。また機会があれば、参加したいと思います。

(参加者の感想②)

交流会終了後、午後のセミナーにも出席しました。講師にはゲストスピーカーとして、春日市財政課主任の西祐樹氏、長浜市立余呉小中学校 主任事務主査の松田幸夫氏が出席されました。

セミナーの目的は、①「セミナーが終わった時、どういう状態でありたいか」②「どういうインプットがあれば共通認識をもって臨めるか」③「どの議題が、どれくらいの論点があって、どう話をもって、どうおさめるか」の3点であり、セミナー終了時に少しでも意識が変化していると良いと説明がありました。

西様の講話では、「これからの学校づくりは、つながりと対話から」を重点に置き、コミュニティ・スクールを活用した春日市の取組を紹介しながら、目指す子ども像を学校・保護者・地域と共有し、目標を立てることで、理想の学校をつくることできるとありました。

松田様の講話では、学校だけに閉じることのない社会に開かれた教育課程の実現に向けて、コミュニティ・スクールに予算面でかかわることができる財務の専門職である事務職員の積極的な参加を促されていました。また、地域協働の観点として「熟議」「協働」「マネジメント」が重要であり、困難なことが生じた場合はこの観点に立ち返ることが大切だということを示されました。具体的には、余呉小中学校での取組である、教員・保護者・地域・子どもで話し合い（よごとく）をもつことで、課題や成果を共通認識し、より良い学校づくりに生かされています。

講師2名の講話内容は、学習指導要領の改訂に伴って謳われている「社会に開かれた教育課程」を実現することを念頭に置いた情報発信でした。ここで得た情報を、インプットし、自分の勤務校の状況等を踏まえてアウトプットすることを意識して、トークセッションに移りました。

トークセッションでは、トークテーマをもとに、個人で考えたたり、班で意見交換をしたりして、考えをまとめ、発信する（その場で発言する）ことが求められました。トークテーマは、私たちがすべきこと（個人単位）、学校・家庭・地域の目指す子ども像（組織、団体単位）、学校・家庭・地域の協働を持続可能にするためには（長期展望に立った取組）、というように、流れが構築されていて考えやすいように考慮されていると感じました。実際に自分の勤務校や地域の状況を踏まえることで、とても実践に近い状態で考えることができました。

セミナーの最後には、「マイV（I?）・A・Pシート」を活用して、「私のイメージ（I）地域連携でやってみたいこと」、「私のアクション（A）そのために私はこう行動する!」、「私のパッション（P）私はこんなことに燃えたい!」という、それぞれの項目について書き出し、発表をしました。

このセミナーに参加して、「社会に開かれた教育課程」について再認識したとともに、その実現のためには、学校事務職員の役割が重要だと感じました。地域連携を担う学校事務職員とは何をすれば良いのかを難しく考えるのではなく、自分のできることから取り組むことを目指していこうと思いました。学校にいる行政職員として、ヒト・モノ・カネ・情報をマネジメントできる人材になるために、学校事務職員とコミュニティ・スクールのかかわりについて更に勉強してみます。大変有意義な時間でした。

熊事研研究部 研究班長 宇城市立松橋小学校 山本 晋也

あしがき

令和3年7月の研究部基調提案に続いて、今回の研究大会もLIVE配信となりました。

廣田様からのご講演にもありましたが、「今の学校環境はベストな状態か」これは大変考えさせられる投げかけだと思いました。

おそらく「ベストな状態である」と答えられる人は少ないのではないのでしょうか。日々の仕事のなかで少しずつベストな状態に地道に近づけていくしかないと思い、今日からの業務に取り組んでいきたいと思えます。

熊事研研究部 情報調査班 会報担当